



口絵25-1 田中柳江「臨安山色図巻」部分（黒川古文化研究所）



口絵25-2 田中柳江「臨安山色図巻」部分（黒川古文化研究所）



口絵25-3 田中柳江「臨安山色図巻」部分（黒川古文化研究所）



口絵26 田中柳江「臨臯亭扇面」（黒川古文化研究所）

「資料紹介」二代黒川幸七に関する書簡

川見典久

はじめに

黒川古文化研究所は昭和二十五年（一九五〇）、三代黒川幸七所有の文化財、土地、建物ならびに基本金の寄附を受けて設立された。大阪で証券業を営んでいた黒川家が、三代にわたって集めた東洋・日本の古美術、考古資料を収蔵しており、その中核をなすのが二代黒川幸七（一八七〇—一九三八）の蒐集した中国書画、鏡鑑、貨幣、刀剣などである。

二代幸七は自由を好む闊達な性格であつたらしい。家督を継いだ後も店の運営は番頭に任せ、自らは盆栽や造園、古美術品の蒐集に情熱を傾けた。兵庫県武庫郡御影町（現神戸市御影）に築かれた別荘（図一）は、庭に植えられた十数本の梅の古木と、座敷の欄間に掲げられた伝頼山陽筆の額にちなんで「飛香館」と呼ばれ、ここを舞台に文人墨客との古美術鑑賞や清談が繰り広げられた。犬養毅（木堂）、内藤湖南、羅振玉など当時の文化・学術の中心にいた人物とも親交を結び、東洋古美術蒐集への関心を深めていった。当時、中国は清末民国初期の混乱期にあたり、次々と貴重な文物が日本にも流入してきていた。幸七は彼らの助言や協力を受けながら、美術品としてそれらを蒐集するだけでなく、学問の発展のための研究資料として供した。現在も、犬養木堂、羅振玉らの書や、

内藤湖南、羅振玉、山本竟山らの筆による跋や箱書を有する美術品が収蔵され、往時を偲ばせる。

一方、これら文化人との交流を示す資料として、幸七に宛てられた書簡類も残されている。調査の結果、飛香館を訪れた内藤湖南の礼状や、天津訪問中の南画家からの書簡など、収蔵品からだけでは分からない交流の有様が窺え、コレクションの形成を考える上でも重要との感を強くした。黒川コレクションの形成された時期は、白鶴美術館、藤井有鄰館、泉屋博古館に収蔵される中国美術や、上野コレクションや阿部コレクションの絵画など、現在も美術館・博物館の中核となっているコレクションが形成された時期である。これらの東洋古美術コレクションがどのように形成されたのか、大正から昭和前期の関西における文化人の交流や美術品蒐集のあり方を考えるうえでも本書簡類の持つ意義は少なくない。

そこで、伝来する書簡のなかで資料性が高いと考えるものについてその目録と翻刻を掲げ、若干の解説を付して紹介することとした。二代幸七の交友関係とそのコレクションの形成過程について、また当時の文化人たちの意識や交流を考える上での一助となれば幸いである。

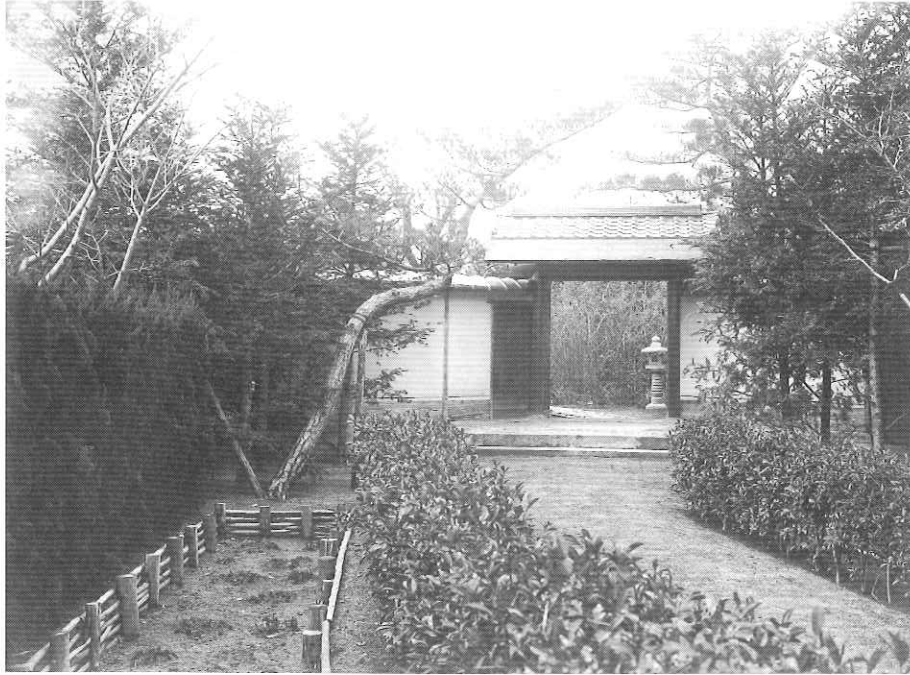


図1 大正初め頃の黒川家御影別荘（飛香館）

凡例

- 一、黒川古文化研究所が収蔵する二代黒川幸七に関する書簡類のうち、資料性が高いと判断したものを収録した。
- 一、漢字は原則として常用漢字および現行活字体に、変体がなはひらがなに変更した。
- 一、読みやすさを考慮して、適宜、句読点・並列点を付した。
- 一、くり返し記号については、漢字は「々」、かなは「、」「く」に統一した。
- 一、読解不能な文字は□とした。
- 一、人名は敬称を略した。書簡の差出人については本名を記したが、号が一般に有名である場合などは、本名の後に（ ）で示した。
- 一、人物・語句説明は『国史大辞典』、『大日本書画名家大鑑』、『改訂増補東洋史辞典』（京都大学文学部東洋史研究室編、東京創元社、一九六七年）、『書道全集』一二五（平凡社、一九五七年）、鶴田武良「原田悟朗氏聞書 大正―昭和初期における中国画コレクションの成立」（『中国明清名画展 中国天津市芸術博物館秘蔵』、財団法人日中友好会館、一九九二年）、成田山書道美術館監修『近代文人のいとなみ』（淡交社、二〇〇六年）を参考にした。
- 一、研究所の収蔵品について言及する際、『黒川古文化研究所収蔵品目録』所載のものについては「目録145」などと記し、さらに「書0291」「銅26」などの収蔵番号を付した。

黒川古文化研究所蔵 二代黒川幸七関係書簡 目録

No.	日付	差出人	宛名	内容
1	大正2年3月16日消印	蘭亭会（京都府立図書館内）	黒川 幸七	大正2年4月12日・13日開催蘭亭会の案内状。別紙「蘭亭会縁起及章程」。
2	大正2年3月19日	小川為次郎（簡齋）	黒川 幸七	谷如意旧蔵「真草千字文」複製本の進呈。
3	（大正2年）3月20日	小川為次郎（簡齋）	黒川 幸七	北宋拓「聖教序」複製本贈呈に対する礼状。
4	大正2年3月20日	内藤虎次郎（湖南）	黒川 幸七	北宋拓「聖教序」複製本贈呈に対する礼状。
5	大正2年3月21日	鳥居 赫雄（素川）	黒川 幸七	北宋拓「聖教序」複製本贈呈に対する礼状。
6	大正2年3月23日	岡 野 養之助	黒川 幸七	北宋拓「聖教序」複製本贈呈に対する礼状。
7	大正2年3月26日	石 上 壺三郎	黒川 幸七	北宋拓「聖教序」複製本贈呈に対する礼状。
8	大正2年4月7日	磯野 惟秋（秋渚）	黒川 幸七	朝日新聞「蘭亭会の壮観」記事草稿。
9	大正2年4月11日	日下部東作（鳴鶴）	黒川 幸七	北宋拓「聖教序」複製本贈呈に対する礼状。
10	（大正2年）4月30日	犬養 毅（木堂）	黒川 君	北宋拓「聖教序」複製本贈呈に対する礼状。
11	大正3年12月5日	油谷博文堂	飛香館主人	詳細不明。山本先生にご覧に入れたところ大満足。内藤博士を訪問。また羅先生を訪問する約束をした。
12	大正4年4月1日消印	田中 直（柳江）	黒川 幸七	旅行先の天津より近況報告。
13	大正4年6月29日	犬養 毅（木堂）	黒川 幸七	趙孟頫「老子道德経」複製本贈呈に対する礼状。
14	大正4年6月29日	磯野 惟秋（秋渚）	黒川 幸七	趙孟頫「老子道德経」複製本贈呈に対する礼状。
15	大正4年7月2日	石 上 壺三郎	黒川 幸七	趙孟頫「老子道德経」複製本贈呈に対する礼状。
16	大正5年8月23日	犬養 毅（木堂）	黒川 幸七	木堂の揮毫に対する幸七の礼状への返信。
17	己未（大正8年）仲夏	羅 振 玉	飛香館主人	中国へ帰国する際の幸七に対する贈答詩と羅振玉の肖像写真。封筒なし。
18	昭和7年9月11日	原 田 庄左衛門	黒川 幸七	五男悟朗に対する愛顧を願う挨拶状。
19	昭和7年11月8日	内藤虎次郎（湖南）	黒川 幸七	蔵品観覧に対する礼状。梅原末治・三男戊申・郭沫若の紹介。
20	昭和7年11月21日	梅 原 末 治	黒川 幸七	蔵品観覧と拓影・写真機贈呈に対する礼状。
21	昭和10年7月9日	梅 原 末 治	黒川 幸七	幸七蔵の玄鳥壺について容庚氏の発表した論文抜刷を別便にて送付したこと、重要美術品として申請したことの報告。
22	昭和11年9月22日	犬 塚 力	黒川 幸七	国時短刀の預かり状。幸七から北白河宮へ献上の申し出。
23	昭和11年11月2日	犬 塚 力	黒川 幸七	国時短刀献上に対する挨拶状。北白河宮より銀製花瓶1対・白羽二重1疋を下賜。
24	昭和13年1月31日	原 田 悟 朗	黒川福三郎（三代幸七）	紀鎮の代金支払いに対する礼状。重要美術品名義変更申請の報告。
25	昭和16年12月11日	水 野 清 一	黒川福三郎	『龍門石窟』出版について二代幸七の拓本寄贈に対してあらためて礼状。

翻刻

1 大正二年三月日 蘭亭会案内状

拝啓 別紙趣意書ノ如ク蘭亭会開催致候間、何卒御賛同御来会被下度、此段御案内申上候、敬具

但シ会費ノ徴収等一切相省キ候得共、御来会ノ諸彦ニシテ天授庵祭奠ノ当日午餐御注文ノ向ハ、実費金貳円ヲ添へ三月三十一日迄ニ京都府立図書館内蘭亭会事務係へ御申込被下度候、

大正二年三月 日

首唱者
会 幹

〔印「博文堂記」〕

黒川幸七様

侍史

(別紙) 蘭亭会縁起及章程

神田喜一郎「大正癸丑の蘭亭会」(『敦煌学五十年』、筑摩書房、一九七〇年、一九六二年初出)、
『昭和癸丑蘭亭展図録』(社団法人日本書芸院、一九七三年)参照。

【蘭亭会】

蘭亭は晋・永和九年(三五三)に王羲之が文雅の士四十一人と集まつた浙江省会稽山近くの名勝。のち、同じ癸丑の年に文雅の士が相会してその古事を継ぐということがたびたび行われた。大正二年は永和九年から二十六周目の癸丑にあたる。

2 大正二年三月十九日 小川為次郎(簡齋)書簡

拝啓 時下嚴寒之砌ニ御座候

処、益々御多祥之段奉賀候、

陳ハ谷如意翁旧蔵真草

千字文、前年小生之収蔵ニ

歸シ候処、今回珂羅板ヲ以テ

印行致候間、忝部進呈仕候、

幸ニ御清玩之具トモ相成候ハ、

本懐之至ニ奉存候、 頓首

大正二年三月十九日

小川為次郎

黒川幸七様

侍史

【小川為次郎】(一八五二〜一九二六)

東京出身。号は簡齋。第百三十銀行、日本信託銀行、阪神電鉄、第三銀行などの取締役を歴任。

3 大正二年三月二十日 小川為次郎（簡齋）書簡

拝啓 時下春暖

相催候処、益々御多祥

之段奉賀候、陳者本日ハ

御所蔵北宋拓聖教

序影本御惠贈ヲ辱

シ、感銘之至ニ不堪奉

存候、右ハ氈蠟之見事

ナル流伝ノ正キ真ニ希

世之墨宝ト可申、先般

御収蔵ニ帰シ候趣伝承

仕リ、一度拝見之栄ヲ得

度奉存候処、不図御恩

呪ヲ蒙リ雀躍此事ニ

御座候、即チ永ク家宝ト

シテ重襲可仕候間、此段

御開置奉願候、

先ハ不取敢御礼申上度、

如此ニ御座候、 頓首

三月二十日

小川為次郎

黒川幸七様

侍史

【北宋拓聖教序】

当研究所蔵「大唐三藏聖教序（集土義之書）」（目録4-160、書029）。

聖教序は唐の高宗の咸亨三年（六七二）に当時の都長安の弘福寺に建てられた碑。三藏法師玄奘がインドから将来し漢訳した仏典に対して、

唐の太宗が御製の序文を賜り、弘福寺僧懷仁が王羲之の書蹟の文字を集めて作られた。この碑は王羲之の書法作品の第一に挙げられて歴代にわたって学習されたため、夥しい数の拓本が取られた。

4 大正二年三月二十日 内藤虎次郎（湖南）書簡

拝啓 景印北宋拓聖教序二帖

御惠賜を忝くし、殊に少しばかり

鄙見相述候為とて結構な御品

御遣し被下、恐縮之至奉深謝候、

右いさゝか御礼を申上候、不一

三月廿日

虎次郎頓首

黒川幸七様

【内藤虎次郎（湖南）】（一八六六—一九三四）

東洋史学者。字は炳卿、号は湖南。また黒頭尊者の別号がある。大阪朝日新聞、万朝報などの記者として活躍。明治四十年、京都帝国大学文科大学に迎えられる。博学多才で詩文に長じ、書を良くした。大正十五年停年のち、京都府相楽郡瓶原村に恭仁山荘を築いた。

5 大正二年三月二十一日 鳥居赫雄(素川) 書簡

拝啓仕候、唯今

不図秋緒先

生を以て貴宝

印本御恵

賜被下奉深

謝候、御蔭

にて眼福を獲、

永く珍藏可仕候、

右御礼迄、

敬具

三月念一

鳥居拜

黒川君

梧右

【鳥居赫雄】(一八六七〜一九二八)

新聞記者。号は素川。明治三〇年大阪朝日新聞社に入社。二十一年間記者を務めたが、大正七年白虹事件で引責辞任。翌年『大正日日新聞』を創刊したが、一年で解散した。

拝啓 益々御清適奉

賀候、今回御上版相成候、北

宋拓集王聖教序

壹冊、社友磯野君を

経て御恵贈に与り、平

生好む道ニ申志未識之

間、□を願ふに暇あらず、余

りの珍貴に御辞退

も不申上、難有御請仕候、

先般内藤博士が羅氏

之手より将来して出版相成

□者に比するに、殆んど比較

にならぬ優秀之出来、真に

右軍之面目に接するの

心地有之、永く貴下之記

念として襲蔵可仕者候、

右不取敢御礼まで申達候

三月廿三日 頓首

養之助

黒川雅契

【岡野養之助】(一八七八〜一九四九)

新聞記者。兵庫県生まれ。早稲田専門学校文学科を卒業し、明治二十九年大阪朝日新聞社に入社。

6 大正二年三月二十三日 岡野養之助書簡

7 大正二年三月二十六日 石上壺三郎書簡

拜啓

春寒之候ニ御座候処、

筆硯益々御清福

奉大賀候、陳者御珍蔵

之北宋拓聖教序ハ

実ニ海内之第一本

ニして精鑑家之

高く垂涎不能止

之名搦本ニ御座候処、

先般博文堂之請を

御容之通御上版之由

伝承仕候、定而臨池

家にて古実ニ可則也、

昨夜不図も磯野先生

を訪問仕候処、美装

之名帖を被示、是れハ

今回特ニ学書会員

ニ老本宛御忠贈被下候

旨拝承、欣躍罷在候、

永く家宝として

愛玩可仕候、先ハ不取敢

以書中御礼申上

度、何れ拝芝方謝

可申述候、草々謹言

三月廿六日

石上壺三郎

黒川飛香学台

【石上壺三郎】（生没年不詳）

詳細不明。本書簡より磯野秋渚の主催する学書会の会員の一人であると思われる。住所は本書簡では西区土佐堀二丁目、書簡15では西区鞆北通二丁目。

8 大正二年四月七日 磯野惟秋（秋渚）書簡

◎蘭亭会の壯観 来ル十二、十三ノ両日京都岡崎

図書館及び南禅寺（中）天授庵ニ於テ催ス同会ハ首唱者

ノ数偶然蘭亭ノ行数ニ合シタレバ会員ヲ同字数ニ因ミテ

三百二十四名ト定メ之ニ尤モ意匠ヲ凝シタル種々ノ記念品ヲ

須ウベク尚蘭亭ニ祀レル王右軍ノ神位ヲ拓シ来リ且ツ

同所ナル清流激湍ノ水ヲ神位ニ薦ムヘク已ニ汲ミテ持帰

レリ同日展観中希世ノ珍品ト称スベキハ左ノ如シト

●定武蘭亭△唐荆川本（犬養氏）△游丞相本（羅氏）

○開皇本（同上）△○神龍本（内藤氏）○顛上本

（羅氏）●唐拓十七帖（上野氏）△唐拓十七帖（内

藤氏）△黄庭経（内藤氏）●南唐拓澄清堂帖（

大西氏) △翁覃溪校正明肅府本淳化閣帖(同上)

△火前本真賞齋帖(同上) △麟岡齋帖(同上) △

餘清齋帖(山本氏) △宋拓大觀帖千金帖項墨林旧

藏(支那常熟翁氏) △越州石氏帖(羅氏) ●北宋拓

聖教序(黒川氏) △北宋拓聖教序(上野氏) △宋拓

半截碑(内藤氏) ●真仁法親王摹張乱帖(妙法院)

△孔侍郎帖(岡田氏) 遊目帖(足立氏) △真草

千字文(小川氏)

(朱筆)

出品非常に多く已ニ昨日入洛鑑査致候、右記

以外にも見るべきもの尠からず実ニ近來之

大優事之墨縁を慶し候、東京にても

貴藏の聖教序ハ大評判之よし大賀ニ候、

【磯野惟秋(秋渚)】(一八六二—一九三三)

詩人、書家。伊賀上野生まれ。字は秋卿。秋渚と号し、また石秋、少

白山人、秋道人、碧雲仙館、王水精廬、古敢堂などの別号がある。通

称は於菟介。明治二十九年、大阪朝日新聞に入社し、大阪の文壇にお

いて活躍。『なには草』『五花載詠』などを著した。書をよくし、明

治四十二年には学書会を起こしてこれを率いた。新聞社を退社後、晩

年は大阪の北郊に移り、書法を教授して過こした。

9 大正二年四月十一日 日下部東作(鳴鶴) 書簡

肅啓 未明拜晤候得共、益御安福奉賀候、陳ハ

本月初油谷博文堂ヨリ來書、今回北宋拓

集王聖教序御新獲影印之上、同好者ニ

被相贈候ニ付、老拙ヘモ御惠贈被下候趣ヲ以テ美

装之襖帖一部到來、実ニ意想外之事ニ

有之候、深辱奉千謝万謝候、旧拓之善美者

諸家跋語之ヲ尽ス余カ贅言ヲ不要、影印之精

巧殆ント真本ヲ觀ルノ想アリ狂喜不啻也、永ク

齊中ニ存シ愛玩可仕候、早速御礼書ヲ可送之

処、去ル三日此地蘭亭会前後大多忙、老人少々

疲労致し数日閑静養致し居候為、送書遅延ニ

涉り候段、御宥被下度相願候、右御礼申上候、匆々

大正癸丑四月十一日

頓首

日下部東作

黒川幸七様

榻下

【日下部東作(鳴鶴)】(一八三八—一九三三)

書家。名は東作、字は子暘、号は東嶼、翠雨、のち鳴鶴。別号に野鶴、

老鶴、鶴叟。彦根生まれ。卷菱湖に書を学び、また貫名崧翁(海屋)

に私淑。明治維新後、太政官に出仕し大久保利通の知遇を得たが、そ

の死後官を辞して書道界に入った。清人楊守敬の來朝を機会に巖谷一

六らとともに漢魏六朝の書法の研究に専念して新風をもたらした。

10 大正二年四月三十日 犬養毅(木堂) 書簡

敬啓 御珍蔵聖教序

景本御恵寄を蒙り、

御高誼不堪感存之至、

原本幸ニ蘭亭会にて

拝見致候ニ付、尚更感興を

増し、日夕原本ニ侍スルノ

想を来し申候、急忙中

乍延日御礼申上候、忽々不一

四月三十日 犬養毅

黒川君 梧右

【犬養毅(木堂)】(一八五五—一九三三)

政党政治家。号は木堂。明治七年慶応義塾に入り、卒業後、報知新聞記者となる。十五年立憲改進黨に参加、明治二十三年に衆議院議員となる。昭和六年内閣総理大臣となるも、五・一五事件で暗殺された。書にすぐれ、初め宋の米芾、蘇東坡、黄山谷を学び、後には清の張廉卿を学んで木堂流を作り出した。

11 大正三年十二月五日 油谷博文堂書簡

敬啓 山本先生ニ御覽ニ入れ候処、

実ニ夢之如ク不可思議ト大満

足大賛成ニ御座候、委曲ハ拜謁之上萬々奉申上候、尚内藤博士も

訪問、夫より夜中羅先生相問

御約束仕候間、御留意被下候、

只今(夜十二時)帰阪乱筆ヲ以

奉申上候、早々頓首

飛香館御主人様 油谷博文堂

侍史 再拝

【油谷博文堂】

明治二年、東京日本橋久松町で出版業をはじめ。日露戦争の頃大阪に移って原田博文堂を油谷博文堂と変え、コロタイプ印刷による美術出版をはじめ。中国で辛亥革命が起こると、中国骨董を手がけるようになり、関西の上野理一、本山彦一、小川為次郎、東京の山本悌次郎らの蒐集に関係した。書簡18の原田庄左衛門(一八五八—一九三八)は博文堂主人で犬養木堂、内藤湖南、長尾雨山らとも親交があった。書簡24の原田悟朗(一八九三—一九八〇)は庄左衛門の五男。

【山本竟山】(一八六三—一九三四)

書家。諱を由定(繇定)、号は岐山のち竟山と改める。別号に韓鳳、鳳鳴、金華山民、齋号を餘清齋という。神谷簡齋、日下部鳴鶴、楊守敬らに書を学ぶ。明治三十八年台湾に渡り総督府に勤めたが、耳が遠くなったため、同四十五年京都に居を移した。内藤湖南、富岡鉄斎、長尾雨山、羅振玉らと親交が深く、犬養木堂とも交流があった。

拝啓仕候、弥々□□□□、近日
春安帰送候処、先以
御清祥奉賀候、当地立春
以後頗ニ加暖、昨日来春
雪今日やみ申候、恰も御地
の寒雪同様にて道路
一寸泥滑ニ御座候、今夕大
風塵土を飛ばし所謂
黄塵万丈ニ御座候、先ニ無
事津留に仕候間、乍憚御
安心被下候、留主宅二月々
御手当被下候而、毎度悦状
より候以御礼、後顧の憂
も無之、研究に従事致
候旨、全く御高庇と奉感
銘仕候、扱画学上参考
ニナルベキ古画十二月頃迄ハ
手掛りも無之、心外ニ存仕候
処、十二月頃より蔵幅家
と心易く相成数多観覧
いたし候、過日其人同道にて
琉璃廠骨董舖より
方以智の臨李龍眠白

描山水極細密の帖一
冊取求申候、宋画ハとても
真蹟無之と存候ニ付、これにて
甘心可仕候、実ニ一筆の織
工ニ陥り候所無之、感服
の事ニ御座候、只々こまり候ハ
支那人ハ買氣を見せ
ぬと好品物を出し不申、
白人黒人ニ不限誠の人間ニ
御座候、外ニも書画硯墨ハ
随分有之申候、若し思
召有之候ハ、買求可申候、
左候ハ、程々好品を飲観
覽了ヲ得て小生の研究上ニ
も大利益ニ御座候、
墨伝し事これ迄画論
も読み且つ日本古人の画も
精観いたし仕候へ共、不心付
ニ仕候処、天津にて静座
の工夫にて不図究明いたし、
それより宅より画論の書物
取よせ取調候処、皆々一致
いたし居、始て豁然貫通
いたし候、其後十一月頃わざく
天津より戴文節公

(名熙字醇士)の真蹟画冊

一覽確と証左を得申候、

それより古人の画を觀ルニ

皆々同一墨法にて、石田・

徵明・董其昌・四王吳惲、

皆々一家の法ハ有之候へ共、

大同小異の墨法ニ御座候、

これにて画論の可解不可

解様の所も逐一明瞭

ニ相成申候、此頃ハ名山大

川の觀覽にて十分の事と

奉存候、筆ハ北方ハ不可

南方可と存候、紙ハ宣

貢と申て上等紙長

短色々有之候、此紙相試

候処、始ハ紙ニまけ申候、

此頃如意ニ相成申候、過日より

宣貢長サ一丈二尺位の卷

相認御送付可申、一日にて

準備ハいたし仕候へ共、氣

後れいたし未着手、学力

未至所□と被致候、昨日

黄鶴山樵の画一覽

いたし候、にせものにて落胆

致候、此頃東京の某人

北宋拓聖教序一本

被購候、一見いたし候ニ明

拓ニ御座候(値千金)、御氣

の毒ニ御座候、数日前

勝山岳陽と申古錢家

ニ出会申候、古錢拓本もらふ

約束いたし候、入手次第御送

付可申候、

夏殷周秦漢古銅印

百餘顆売物有之候、不

日一覽可仕筈ニ御座候、

一天津方葉雨の古錢拓

本及所々の三代秦漢

印影(天津にて押捺)加封致候、

御慰ニ近日被仕候、

先ハ右御不沙汰之詫旁

近況申上致候、如此御座候、

二月廿六 夜

田中直 頓首

黒川飛香様

貴下

【田中直(柳江)】(一八六六?)

南画家。号は柳江、字は義卿。京都に生まれ、のち大阪安堂寺町に住す。画を行徳玉江、漢学を伊藤雪香に学ぶ。

13 大正四年六月二十九日 犬養毅(木堂) 書簡

敬啓 趙松雪小楷

道德經景本

御患寄を蒙り、

御厚意鳴謝致候、

只今旅行先より帰都、

此手披閱頗ル

爽快を覚候二付、不取敢

御礼申上候、草々不一

六月廿九日

犬養 毅

黒川幸七殿

【趙松雪小楷道德經】

当研究所所蔵「趙孟頫 老子道德經」(目録4-102、書030)。明の収

蔵家・顧從義の跋、題簽は清の梁同書。

趙孟頫(一二五四-一三二三)は浙江省呉興の人。字は子昂。松雪、

鷗波道人、水晶宮道人などの号がある。諡は文敏。宋の王族で眞州司

戸參軍となつたが、宋滅亡後、元の世祖に召されて元に仕えた。

(御清適二被為在候哉、

奉伺上候、扱本日□

□により御菓子御患

贈被下難有奉厚

謝御座候、將又過日

は博文堂して御新

獲之趙集賢

道德經真蹟一

冊波黎版複成

のよしにて御寄贈

深く御礼申上候、永く

珍賞可致候、仲

姫手集の烏絲

闌、大に妙味を感

じ申候、

御寸暇よふく御来

話奉得上候、□改

在拜晤、草々頓首

六月廿九

惟秋

飛香大兄

14 大正四年六月二十九日 磯野惟秋(秋渚) 書簡

【烏絲闌(欄)】

黒野紙、または黒野を施した絹。女子の艶書などに用いられた。

不順之氣候蓋

15 大正四年七月二日 石上壺三郎書簡

拝啓

薄暑之候ニ相成候処、

尊家益御清福

ニ被為在奉大賀仕候、

情御無沙汰仕候段、

平ニ御許容可被下候、

扱昨日秋緒先生より

御侍送にて御新

獲之趙文敏公真

蹟、実ニ見殊なる

御事ニ御座候、御上版吾等

割愛之栄を賜ル

狂喜不能措候、千萬

拝謝之至ニ奉存候、

右ハ長く家宝として

珍重可致候、何れ拝芝

万謝可申上候へ共、

先ハ不取敢以書中

御礼申上候処、如此ニ御座候、

草々不尽

七月二日 石上壺三郎

黒川飛香老台

御侍史

16 大正五年八月二十三日 犬養毅（木堂）書簡

敬復 揮毫乱塗

御座候処、鄭重之

芳翰ニ接し不堪

慚愧之至、專此ニ

暑安を祝候、勿々不

八月廿三日

犬養毅

黒川幸七殿

17 大正八年仲夏 羅振玉 呈飛香館主人詩（図2）

八年浮海鬢成霜 魂夢依然恋首陽

他日盲翁伝活物 小臣有菴傍 先皇

己未仲夏将自海東言帰京国留別

飛香館主人 雪翁羅振玉題記

【羅振玉】（一八六六—一九四〇）

考証学者。字は叔言、叔蘊。号は雪堂、貞松老人。宣統三年（一九一

一）武昌に革命が勃発すると、内藤湖南、狩野君山らの勧めで来日し、八年間京都に滞在した。民国八年（一九一九）帰国して天津に住み、

宣統帝（溥儀）の師傳としてその教育にあたり、満洲国成立

後は要職を歴任した。



図2 帰国に際して羅振玉が二代幸七に贈った肖像写真と詩

18 昭和七年九月十一日 原田庄左衛門書簡

敬啓

尊家各位愈御揃御清福ニ被有涉
候段奉恭賀候、其後永々心外之
大御無音打過候段、平ニ御仁恕
被下候、就テハ先般来五男悟朗参邸
御厚情御引立相蒙り難有奉
感佩候、乍此上下拙同様御愛
顧御引立之程奉懇願候、
先ハ乍恐愚翰ヲ以大御無沙汰
御詫び旁御挨拶迄、

恐々頓首

九月十一日

原田庄左衛門

飛香館黒川御主人様

侍曹

19 昭和七年十一月八日 内藤虎次郎(湖南)書簡(図3)

拜啓 一昨日は真に久々振にて拝
芝、御珍藏品ゆるく拝見、梅原氏始
め京都研究所員の満足も思ひ
やられ、且つ三男戊申まで御相伴

之榮ヲ得、いろく御造作かけ奉り、
何とも御礼の申上候やうも無之候、前回
参上之時より光陰瞥眼已に十
七八年も経過致居り、その間小生も
命拾ヒの大患ヲ経て、尊台も長く
御わつらひ被遊候趣ながら、かくも双
方とも無事の拝晤を得候事、
天幸とも可申哉、寔に欣慰
無量に候、御藏品に就てハ前
度拝見之折以來何かと研究の機
会も得度存居候処、近頃ハ梅原君
以下、その道精通の人々も多くなり、
いづれ近々細密の研究に入り可申
存候間、何卒将来とも同君等
の希望御許容被下候やう併て
奉願上候、尚金文の方ハ三男も
目下講読中に候間、是又近々
御世話願上度、例の支那人郭
沫若氏甲骨研究之件も願
上申度候、
尚当日は若主人御夫婦御方にも
拝芝を得、是又欣幸之至、何
卒よろしく御伝被下度、帰途は
大阪上本町迄自動車御送
を辱くし千萬辱く奉

存候、預定の時刻午後六時

四十八分加茂に着き無事

帰莊致候間、御放念被下度候、

先ハ右御礼申上度不取敢如此候

間、昨日来急に寒氣相加はり

御同様老体畏寒之義故

何卒切角御保摂之程

奉希上候、頓首

十一月八日

虎次郎頓首

黒川老台侍史

【梅原末治】（一八九三—一九八三）

考古学者。ヨーロッパ・アメリカで遊学の後、昭和四年に東方文化学院京都研究所員及び京都大学文学部講師となり、同八年に助教、同十四年に教授となる。京都大学名誉教授。銅鐸・鑑鏡・中国青銅器などの研究で業績を残した。当研究所設立にあたり、理事兼研究員として収藏品図録『古鏡図鑑』の編纂や展観、講演に尽力した。

【郭沫若】（一八九二—一九七八）

中国の文学者・歴史家・政治家。沫若は号で、本名は開貞。一九二三年日本に留学。二六年北伐に従軍し、翌年日本に亡命して學術研究に専念。三七年帰国し、四九年の中華人民共和国以後、政務院副総理などの要職を歴任した。中国古代史と甲骨・金文学に造詣が深い。

有為一何人其一人拓之有
 其以珍藏早やしく相見梅原氏始
 々主部研究室から満三の思ひ
 下れ是二三男や申さるしお付
 々業とんさうくも送作可奉
 仰る一好のりさうくも奉公前四
 七十年一任の此拓のりさる事
 命拾ふ大患存す尊を危れ
 ともくも趣りやめも腹
 方々もさうのお暇さや
 天草もさるお事や以能
 ともさるしお事や以能

20 昭和七年十一月二十一日 梅原末治書簡

拝啓

先般御珍藏品拝観に参上の際は非常の御歡
 待を蒙り寔に難有く存じ候、其の後感冒にて
 引き籠り居り為に挨拶を申し上げず打過ぎ失礼
 致し候処、御厚情を以て度々御使をたまはり、
 拝眉の際御話の殷墟の貞十文をはじめ、龍

有為一何人其一人拓之有
 其以珍藏早やしく相見梅原氏始
 々主部研究室から満三の思ひ
 下れ是二三男や申さるしお付
 々業とんさうくも送作可奉
 仰る一好のりさうくも奉公前四
 七十年一任の此拓のりさる事
 命拾ふ大患存す尊を危れ
 ともくも趣りやめも腹
 方々もさうのお暇さや
 天草もさるお事や以能
 ともさるしお事や以能

門の拓影一揃、写真機械類御届け下され、い

づれも確に拝受致し候、重ねくの御芳情厚く

御礼申上候、拓影並に写真機械は御言葉に
 従い東方文化学院京都研究所に保存いたし
 申す可く、そのうち所長より改めて御挨拶申し
 述ぶる事と存じ候、右御含み被下度候、
 先日御厚意に依り撮影致し候写真焼付、
 不取敢一組お送り致し置き候、定めし御落

有為一何人其一人拓之有
 其以珍藏早やしく相見梅原氏始
 々主部研究室から満三の思ひ
 下れ是二三男や申さるしお付
 々業とんさうくも送作可奉
 仰る一好のりさうくも奉公前四
 七十年一任の此拓のりさる事
 命拾ふ大患存す尊を危れ
 ともくも趣りやめも腹
 方々もさうのお暇さや
 天草もさるお事や以能
 ともさるしお事や以能

図3 昭和7年11月8日 内藤虎次郎（湖南）書簡

掌下され候事と存じ候、なほ御用の際は幾組にても焼付申す所々、御遠慮なく御命じ下され度候、先は乍延引以略儀挨拶申述候、時下折角御自愛の程祈上候、敬具

十一月廿一日

梅原末治

黒川幸七様

御侍史

21 昭和十年七月九日 梅原末治書簡

拝啓

暑氣相加はり申し候処、御障りもなく互らせられ候哉、御伺申上候、平素は以外の御無沙汰に打過ぎ平に御海容被下度候、さて早速乍ら前年拝見いたし候御珍藏の玄鳥壺に就いて、先般知人容庚氏より照会有之、依って小生の手許より写真など送附いたし置き候処、今般右に連関したる論文発表したる為、抜刷小生の許に送附、御手許へ伝達し呉る様申し参り候、就いては本日別便に附し候間、御受取被下度候、なほ右玄鳥壺は先日重要美術品として指定方小生より申請致し置き候につき、そのうち指定有之べく、これまた御含み下され度候、その後段々と新資料御蒐集の由、是非重ねて拝観の榮を得たきものにて候、よろしく願上候、先は右のみ申述候、時下御自愛被下度候、敬具 七月九日

黒川幸七様

御侍史

梅原末治

【玄鳥壺】

当研究所所蔵「饜飜文壺」（日録1-25、銅26）。昭和十年「銅製饜飜文玄鳥壺 銘アリ」の名称で重要美術品に指定。

【容庚】（一八九四〜？）

中国の考古学者。字は希白。北京大学哲学科卒。羅振玉に師事し、甲骨学・金石学を研究した。

22 昭和十一年九月二十二日 犬塚力書簡

拝啓 時下秋冷之候、

愈御清祥奉慶

賀候、偕今般栗原

彦三郎、松谷豊次郎

氏、貴地ニ罷越し、

御愛刀国時短刀

一振御預二相成、本

日当宮ニ参殿、親

しく拝見之上、当御殿

にて御預り申上候、

尚両氏より貴台

御献上之御内意も承

り、御芳志辱く拝

承仕候、

就てハ篤と取調べ

之上、何分の御挨拶

申上度、右御貴重

品御預之御通知迄、

如斯御座候、

敬具

九月廿二日

北白川宮附宮内事務官 犬塚力

黒川幸七殿

【北白川宮】

伏見宮邦家親王の第十三王子智成親王（一八五六〜七二）に始まる。

明治五年親王が早世すると、特旨に依りその兄宮能久親王の相続する

ところとなった。以降、能久親王の子成久王、孫永久王、曾孫道久王

と継承。昭和二十二年十月、道久親王は皇籍を離脱して北白川氏を称

した。昭和十一年当時の当主は永久親王（一九一〇〜一九四〇）。

【栗原彦三郎】（一八七九〜一九五四）

刀工（銘昭秀）、衆議院議員。栃木県佐野生。師は堀井胤明。昭和八

年、東京市赤坂区氷川町の自邸（旧勝海舟邸）に日本刀鍛錬伝習所を

開設し、刀工の育成に心血を注いだ。

23 昭和十一年十一月二日 犬塚力書簡

拝啓 時下秋冷之候、益々御清穆之段、

奉慶賀候、陳者先般左記

國時短刀 一口

当宮ニ御献上之趣ヲ以而御預申上候処、

殿下ニ御披露申上御満悦ノ上御嘉納

被遊候、就而御挨拶トシテ別紙目録之通

御下賜相成候間、御受納被成下度候、 敬具

昭和十一年十一月二日

北白川宮附宮内事務官 犬塚力

黒川幸七殿

（別紙）

目録

一、銀製花瓶 壺対

一、白羽二重 壺正

24 昭和十三年一月三十一日 黒川福三郎（三代幸七）宛原田悟朗書簡

拝啓

愈御清祥之段

奉慶賀候、

陳者本日ハ

早速と紀鎮に
付代金御下附

を忝く仕り、

感佩罷在候、

尚文部省へは

本日附を以て

重要美術品

名義変更の御届

け仕候間、

御諒承被下度候、

何卒今後共

一層の御引立

御高命之程

奉懇願候、

右以書中御礼

申上候也、 頓首

一月三十一日 悟朗

黒川福三郎様

執事御中

【紀鎮】

当研究所所蔵の紀鎮「春苑遊狗図」(目録四一八、絵巻、重要美術品)。

竹浪遠「「館藏品研究」「春苑遊狗図」とその作者・紀鎮について」

(黒川古文化研究所紀要「古文化研究」第一号、二〇〇二年)参照。

25 昭和十六年十二月十一日 黒川福三郎宛水野清一書簡

黒川福三郎様

御無沙汰いたしてをりますが、皆様ますます

御健祥のこと、拝察いたします、

御先代在世中は、いろ／＼と御厚誼にあ

づかりましたが、そのうちにもいた、いた拓

本数百枚は折しも研究中の龍門石窟

に関するもので、お陰様でわたしどの

研究を非常に進展せしめました、幸

その本が近日完成いたしましたので研究

所から別便で送ってもらいました、御受取り

下さったこと、おもひますが、御先代生前

の御厚誼に対し一筆御礼まで、

なほ緊迫せる時局に皆様の御健康を

祈つてやみません、忽々、

十二月十一日

水野清一

【水野清一】(一九〇五～一九七二)

東洋考古学者。京都大学教授。戦前、東方文化学院京都研究所の同僚・

長廣敏雄とおこなった響堂山・龍門・雲岡などの中国石窟寺院の調査

で先駆的成果をあげた。

(1) 大正二年蘭亭会と「集王聖教序」

癸丑にあたる大正二年（一九一三）、東京と京都で王羲之にちなむ蘭亭会が催された。京都では四月十三日に南禅寺天授庵で祭祀が行われるとともに、十二、十三両日、府立図書館にて展覧会が行われ、王羲之に関する古拓や名家の臨書などの逸品が数多く出陳された。書簡1は二代幸七に宛てられた蘭亭会の案内状である。当会において、幸七は北宋拓「集王聖教序」を出品している。これは明治四十五年（一九一二）に博文堂より購入したもので、清の呉栄光、姜宸英、翁方綱、近代の羅振玉、内藤湖南ら十人の跋が附属している。当時大阪朝日新聞記者であった磯野秋渚は「東京にても貴蔵の聖教序は大評判」と記している（書簡8）。「聖教序」のほか、蘭亭会に関する収蔵品として、当会に寄せられた瞿鴻機の書「集禊七言対聯」（目録4-145、書1076）があり、また油谷達が蘭亭会に出品した「蘭亭叙卷」をのちに幸七が入手している（王澍他「蘭亭序」、目録4-121、書1060）。蘭亭会には当時の名だたる文人墨客、蒐集家が多数参加しており（須羽源一「大正癸丑の京都蘭亭会について」、『書論』三二、一九七三年）、その後の幸七の蒐集に大きな影響を及ぼしたと思われる。

蘭亭会の直前、幸七は博文堂から「聖教序」のコロタイプ複製を出版しており、これを親交のあった小川簡斎、内藤湖南、鳥居素川、岡野養之助、石上壺三郎、日下部鳴鶴、犬養木堂らに寄贈したことからその礼状が伝わる（書簡3、7、9、10）。大正五年十二月十五日谷川達海宛犬養教書簡（『新編犬養木堂書簡集』、岡山県郷土文化財団、一九九二年）

に「博文堂出版ノ十七帖黒川本ハ呉栄光ノ旧蔵ニテ、四、五年前ニ黒川ガ三千円にて買得たるモノニ候」とあるが、「十七帖」は「聖教序」の誤りであろう。大阪朝日新聞社・岡野養之助の書簡6にある「先般内藤博士が羅氏之手より將來して出版」したものは、湖南が明治四十三年に北京へ学術調査に赴いた際、羅振玉所蔵の北宋拓「集字聖教序」を借りて帰り、博文堂から出版した影印本のことである。その後、この「聖教序」は上野有竹斎の所蔵となり、大正二年の蘭亭会にも出品されている。現在は京都国立博物館に寄贈されており、内藤湖南、日下部鳴鶴、羅振玉の跋がある。

「聖教序」複製本寄贈の礼状が伝わる人物のなかで、犬養木堂については三点の書が収蔵されており（目録5-171、173、書324、1323、1351）、前二点にはそれぞれ「黒川君雅鑒」「黒川君鑒」とあることから、幸七のために揮毫されたと思われる。書簡16は木堂の揮毫に対する幸七の礼状を受け、さらに返信されたものであり、これら三点のいずれかに関連すると推察される。また、日下部鳴鶴に関しては「竹石図」（目録5-122、絵303）、「北馬南船七言絶句」（目録5-176、書1319）の二点が現在研究所に収蔵されている。

「聖教序」の複製本を出版した二年後、幸七は趙孟頫「老子道德経」の複製本も出版しており、その寄贈に対する礼状も伝わっている（書簡13、15）。なお、磯野秋渚の書簡14に「仲姫手集の烏絲闌」に妙味を感じたとある。「道德経」の用箋には、中央に「管公樓」、罫線右傍には「仲姫手集」とあり、秋渚はこの点に注目している。仲姫とは趙孟頫の夫人管仲姫（道昇）（一二六二〜一三一九）のことで、夫人の両親を祭るために立てたのが「管公樓孝思道院」である。『秘殿珠林』卷一五には「元趙孟頫書度人經一冊」として「素箋印紅格本楷書、中有管公樓三字、

旁有「仲姫手集四字」、蓋孟頫妻管道昇製以書「文集」紙也」とあることから、中央に「管公樓」、旁に「仲姫手集」と記された素箋紙に、度人経を書いた作品の存在が知られる。当研究所の道德経の他に、このような用箋の用いたものに「楷第太上無級経」がある（『文物天地』月刊 第一九六期、中国文物報社、二〇〇七年）。

一方、書簡2によると幸七は小川簡齋から谷如意旧藏真草千字文の複製本を寄贈されている。この時期、盛んに博文堂から最新のコロナタイプ印刷による複製本が出版されており、蒐集家や書家における活発な寄贈状況の一端が伺える資料である。

(2) 京都学派と黒川コレクション

二代幸七の蒐集を考える上で特に重要な人物は、大阪朝日新聞記者から京都帝国大学教授になった東洋学の泰斗・内藤湖南である。学問だけでなく、書や詩文、書画鑑定にも優れた文化人であり、幸七が東洋古美術を蒐集する際にはその助言にもとづいて行なわれた。書簡11の幸七宛博文堂書簡には、「山本先生」とともに「内藤博士」、「羅先生」が登場しており、彼らとの関係のなかで蒐集が行われたであろうことが推察される。

明治四十四年（一九一〇）、羅振玉は辛亥革命を避けるために旧知である湖南や狩野直喜（君山）を頼り、王国維をともなって京都に亡命し、その際、甲骨、古銅器や典籍書画など多量の文物をもたらし、日本の学界に大きな刺戟を与えた。当研究所の収蔵品にも、羅振玉旧蔵と思われるものが多く含まれ、その書六点が収蔵されるほか、羅振玉が本国へ

帰国する際、幸七に送った肖像写真と詩（書簡17）が伝わる。

清末民国初期の混乱のなか、羅振玉の亡命と相前後して多数の中国文物が日本にもたらされた。幸七もこうした時期に東洋古美術に興味を持ち、博文堂を介した湖南、羅振玉、山本竟山らとの交流で、蒐集を行ったであろう。書簡18は博文堂の原田庄左衛門が幸七に宛てたものであるが、これによれば昭和七年（一九三二）頃より庄左衛門の五男悟朗が幸七のもとへ中国美術を持ち込むようになったようである。一方、書簡24は黒川福三郎（三代幸七）に宛てた「紀鎮」の代金支払いに対する悟朗の礼状である。二代幸七の逝去一カ月後という時期を考えれば、二代幸七の存命中に購入を決めていた、あるいは作品自体はすでに黒川家に持ち込まれていたと考える方が自然であろう。紀鎮筆「春苑遊狗図」は昭和九年七月三十一日付で重要美術品に認定されたもので、当時の所有者は原田悟朗である。付属する黒漆塗りの箱には金漆による内藤湖南の題字がある。

二代幸七の蒐集姿勢は単なる名品一点主義ではなく、研究上意義あるものについて集約的に集めることにあった。当初は公開にそれほど興味は持っておらず、一部の研究者のみに存在が知られるにすぎなかった。しかし、次第に学術的研究に興味を持ちはじめ、学問の発展に役立てようとする考えが生まれてきた。書簡19は内藤湖南が飛香館を訪問した際の礼状である。湖南の三男戊申や梅原末治ら東方文化学院京都研究所（現京都大学人文科学研究所）の研究員をともなって訪れ蒐集品を観覧している。戊申、梅原の研究に対して協力を依頼するとともに、当時日本で甲骨の研究を行っていた学者・郭沫若を紹介している。書簡20はその数日後に梅原末治から届いた礼状であり、この後、青銅器などが研究資料として提供されたことが書簡21からわかる。

昭和十年、幸七は東方文化研究所（もと東方文化学院京都研究所）に對して、殷代甲骨器四五六片の寄贈を行い（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵 甲骨文字 本文篇』、京都大学人文科学研究所、一九六〇年）、その後、龍門造像記の全拓も寄贈している。このとき水野清一らが完成させたのが、東方文化研究所『龍門石窟の研究』（座右寶刊行会、一九四一年）であり（書簡25）、幸七旧蔵の拓本も収録されている。

(3) 南画家・田中柳江との交流

書簡12は大阪の南画家・田中柳江が滞在先の中国・天津から幸七に送ったものである。柳江は大正期の画家格付で三等席に記載されていることなどから（審美画会「日本画家余撰格付表」、大正五年度改正／瀬木慎一『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成』、里文出版、二〇〇〇年、参照）、当時はある程度の知名度があった人物であるといえるが、二代幸七との交流はこれまで取り上げられてこなかった。

今回の資料紹介にあたって調査を進める過程で、彼の作品二点が研究所に収蔵されることを確認した。ひとつは「臨安山色図巻」（絵25、口絵25）である。本図は王翬筆「倣巨然臨安山色図巻」（ホノルル・アカデミー所蔵／『文人画粹編 中国篇七』中央公論社、一九七九年、ECKER Chinese painting in Hawaii, Honolulu: The Honolulu Academy of Arts, 1965. 参照）と構図が一致することから、この作品自身、もしくは同一系統の模本を写したものと考えられる。「大正二年十月筆」とあることから、書簡にある訪中以前の作品である。もうひとつは「臨臯亭扇面」（文3125、口絵26）で、制作年代は不明であるが、画巻と同じ印が

用いられており、両者はそれほど離れてはいない時期の作と推察される。上辺に記されるのは蘇軾（蘇東坡、一〇三六―一〇一）の散文「書臨臯亭」（『東坡題跋』下、『東坡外集』卷五四）である。

東坡居士。酒醉飯飽。倚_二於几上_一。白雲左繚。清江右迴（回）。重門洞開。林鬱_二盆（盆）入。當_二是時_一。若_レ有_レ思而無_レ所_レ思。以受_二万物之備_一。慚愧慚愧。

これは蘇軾が配流された黄州での居・臨臯亭における文章で、扇面の描写もこの文に基づいている。

書簡によると、柳江は画業の参考になるべき古画を求めて北京の骨董街・琉璃廠などを訪れ、手に入れた清・方以智筆「倣李龍民白描山水図」や清・戴熙の真蹟画冊から画論を理解しようとしている。「天津にて静座の工夫にて不図究明いたし」「始て割然貫通いたし候」などと述べ、かなりの研究成果があったらしい。

その他にも、中国の筆や紙についての話、黄鶴山樵（王蒙）の画を観覧したが贗物であった話、東京の某人が入手した「聖教序」の話、錢幣家・方薬雨（方若、一八六九―一九五四）の古銭拓本や柳江が集めた「三代秦漢印影」の話などを語っており、幸七にも当然それらを理解しうる知識があったと解せられる。

(4) 刀剣の収集

北白川宮付宮内事務官の犬塚力からもたらされた書簡22、23は、幸七が北白川宮へ「短刀国時」を献上したことを示す資料である。

幸七は中国古美術だけでなく、刀剣・刀装具にも強い関心を示した。

研究所には百十五口の刀剣が収蔵されているが、かつては二百口を越えた時期もあり、全国でも屈指のコレクションと言える。現在、国公立館や旧大名家、寺社のものを除くと、静嘉堂文庫美術館と佐野美術館の刀剣コレクションがある。前者は岩崎彌之助（一八五一―一九〇八）が明治期に蒐集したものが中心であり、今村長賀（一八三七―一九一〇）の助言によって行われたという（米山寅太郎「静嘉堂の刀剣について」、『静嘉堂名刀百選』、静嘉堂文庫美術館、一九九七年）。一方、後者の刀剣は、戦後に佐野隆一が蒐集したもので、本間順治（薫山）が関わった（本間薫山「刊行によせて」『佐野美術館図録 日本刀』佐野美術館、一九七一年）。幸七の刀剣コレクションはちょうどこの間にあたる大正と昭和前期ごろから蒐集されたと推測されるが、蒐集に至る経緯や購入の詳細は知られておらず、今後調査する必要がある。交流のあった犬養木堂は、明治三十三年に設立された中央刀剣会の発起人で審査員としても名を連ね、刀剣にも造詣が深い。幸七の蒐集との関連の有無も今のところ明らかではない。

本資料の刀剣献上についても、その経緯は不明であるが、書簡22にあるように刀工栗原彦三郎や刀商松谷豊次郎も関わっていることは、その蒐集を考えるうえでも貴重な情報である。

おわりに

幕末・明治以降、日本は急速に西洋化していったが、一方で伝統的な東洋の文化が失われつつある状況を危惧し、それを守り伝えていこうとする人々もいた。そのようななかで、二代幸七もまた、文物の蒐集とい

う形で貢献した。しかし、蒐集された当時を知る人も少なくなり、顧みる者がいなければそれらの情報が急速に失われてしまう状況にある。

今回の調査では、収蔵品の箱書や付属資料、購入記録・領収書類までも含めた検討までには及ばなかった。今後さらに調査を進め、機会があれば順次公にしていく予定である。また、不勉強のため翻刻や解説に誤りがあるかと思う。ご指摘いただければ幸いである。

付記

二代黒川幸七の古美術蒐集に関しては、次の著述を併せて御覧いただきたい。

- ・「大阪の文化人 黒川いく子さん」（『大阪春秋』八、一九七五年）
 - ・「黒川家三代のことども」（黒川古文化研究所、一九八七年）
 - ・「黒川古文化研究所四〇年史」（黒川古文化研究所、一九九〇年）
 - ・西村俊範「黒川コレクションの成り立ち」（『黒川古文化研究所名品展―大阪商人黒川家三代の美術コレクション―』、黒川古文化研究所、二〇〇〇年）
 - ・竹浪遠「黒川古文化研究所の中国美術―大正・昭和前期の関西が育んだコレクション―」（『アジア遊学』九九、二〇〇七年）
- また、趙孟頫に関しては大阪府立大学・西尾歩氏にご教示いただいた。

末筆ながらここに記して謝意を表したい。